

『PIST6 Championship』の会場、「千葉 JPF ドーム」に 現代美術家 松山智一氏が手掛ける作品の常設展示が決定

迫力の高さ4m を超える彫刻作品と、幅約30m の壮大な壁画の共演



©2021 MASAMI SUZUKI PHOTO

株式会社 PIST6 は、千葉競輪場跡地に建築された 250m 周長の木製バンクを備えた「千葉 JPF ドーム」にて、トラック競技の国際大会で行われる「ケイリン」種目に準拠した公営競技として、新しい自転車トラックトーナメント「PIST6 Championship (ピストシックス チャンピオンシップ)」を 2021 年 10 月 2 日(土)に開幕いたします。

そして、この度本トーナメントの会場となる「千葉 JPF ドーム」メインエントランス側のホワイエスペースに、ニューヨークを拠点に活動し、「PIST6 Championship」の優勝トロフィーを手掛けた、現代美術家松山智一氏の作品を常設展示することが決定いたしました。

JPF 千葉ドームのメインエントランスを抜けたホワイエスペースに入ると、同氏の手掛けた作品が「千葉 JPF ドーム」に来場するお客様を出迎えます。まず目に飛び込むのは左右に対に設置された、高さ約 4.5 メートルの迫力ある彫刻 2 作品です。ホワイエ奥の壁面には、幅約 30 メートル、高さ 2.5 メートルにおよぶ壮大な壁画が一角を包みます。松山氏のパブリックアートは、新宿東口駅前広場や明治神宮での展示などで知られています。

報道関係者お問い合わせ先

PIST6 Championship PR 事務局 (サニーサイドアップ内)

担当 和久裕哉 (070-1639-9625) 白石香(070-3362-8952) 一瀬高志

Mail pist6@ssu.co.jp

◇ 彫刻作品について



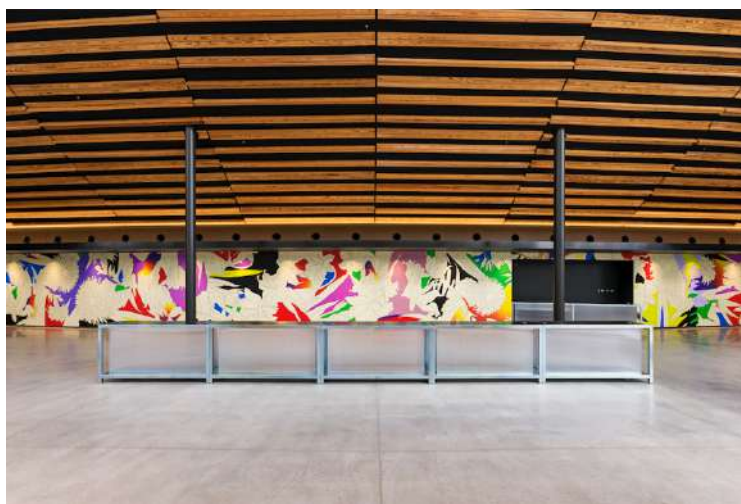
Photography by Makoto Shikuya

(高さ：約 4.5 メートル、幅・奥行：約 3 メートル)

松山氏コメント：

盛者必衰・輪廻転生・起死回生といった人間の営みや生命力、超えるべきハードルや挑戦の連鎖があって我々は存在するというリアリティを、対となった彫刻が力強く表現しています。タイトルは「**Glory Slowly**」（写真左）と「**Immortality Morality**」（写真右）。双方に、月桂樹や中世の神格化された文様、験担ぎのアイコンなどからなる3つの輪の造形が組み込まれています。「Glory Slowly」では向日葵が咲き誇り、「Immortality Morality」では枯れた向日葵がモチーフとなり、生命の表裏一体性を示しています。

◇ 壁画について



Photography by Makoto Shikuya

(高さ：約 2.5 メートル、幅：約 30 メートル)

松山氏コメント：

移ろいゆく世の中にありながら、それでも一つの場所に根を張り、挑み続ける人間の強さと素直さを表現しています。タイトルは“終わりのない手仕事”を意味する「**A Daunting Task**」。背景には鮮やかな色が施されていますが、それとは対照的に主役である花には彩色が施されていません。無彩色の花は、持続やプロセスの中で自己発見や自己成長を遂げる我々自身の存在に問いかける意図を込めています。

【プロフィール】

松山智一 Tomokazu Matsuyama

1976年岐阜県出身。上智大学卒業後2002年渡米。

NY Pratt Instituteを首席で卒業。

現在はNYブルックリンを拠点にスタジオを構え、活動を展開している。

ペインティングを中心に彫刻やインスタレーションも手がける。

また大規模なパブリックアートを各国で手がけることで、世界的に知られる。

これまでにニューヨーク、ワシントンD.C.、サンフランシスコ、ロサンゼルス、シカゴ等の全米主要都市、日本、ドバイ、香港、台北、ルクセンブルグなど、世界各地のギャラリー、美術館、大学施設等にて個展・展覧会を多数開催。

【常設場所】

千葉 JPF ドーム（千葉県千葉市中央区弁天 4-1-1）



Photography by Naoko Maeda



Photography by Makoto Shikuya

* 他にも提供写真あり